如蓮華在水

東洋の精神性はいかに世界平和に貢献しうるか

A・ウォルター・ドーン
石神　豊　訳

はじめに

「おお、東は東、西は西、そしてこの両者は永久に出会わない」

—キプリング「東と西のバラード」

東西両文明は、最も重要な「平和」という問題に対して、これまで基本的に異なった仕方で取り組んできました。

西欧では、まずもって諸国間の平和に関心を向けました。それは、世界戦争を避けるということ、組織的な軍事的脅威を削減するということでした。こうして、国際条約を締結し、その条約の遵守を監視し促進するとともに、実効あるものにするための国際機関を設立するということに、西欧世界の努力が注がれました。つまり、西欧的な平和問題への解決の仕方とは、力の均衡、集団安全保障、国際組織といった考えの具現化に、その全力をつくすというものだったといえます。そこでは、国家が依然として最高至上のものとして存在し、軍事的統制や軍備の縮小から、平和の維持と紛争の解決にいたるまでのさまざまな活動を遂行していく役割をもっています。

この西欧の平和への取り組みから、ウィルソン（アメリカ合衆国第二十八代大統領）に由来する二つの重要な国際機関が誕生しました。それは、世界平和に寄与する、史上初めて諸国間の機関として設立された国際連盟と、その後を継いで、国際連盟の弱点や限界を克服しようとして設立された現在の国際連合です。

他方、東洋では、平和の考えについて、強調点のおき方が西欧のそれとは違っていました。東洋的なアプローチとは、外的というよりむしろ内的なものだったのです。東洋的な取り組み方とは、国家や組織、あるいは他の人々に焦点を当てるというよりも、自分自身をその対象とするものです。すなわちそこでは、国々の行動を変えるというより、むしろ個人の意識のあり方を変化させることにその目標がおかれます。したがって新しい法律を制定するということにではなく、人間精神に内在する法を見出し、解明していくことにその目標がおかれたのです。いいかえれば、諸国間の侵略を予防するための手だてに重点をおくかわりに、人間個人の内部にその侵略の根源を求めようとするところに東洋的な取り組みがあったといえます。その究極の目的は、戦火を避けたり鎮めたりすることではなく、人間の怒り、欲望、そして無知の火を鎮めることにあったのです。

西欧は調停（mediation）の仕方を学んだのですが、他方、東洋では瞑想（meditation）を探求することに努めたわけです。キリスト教徒たちは外なる変化を起こすように祈ることを教えられますが、仏教徒やヒンズー教徒たちは内なる変化を成就するために黙想や唱題を勧めます。ここであらかじめ指摘しておきたいことは、純粋な祈りと純粋な瞑想とは、最終的にはまったく同じ経験であるはずだということです。つまり、東西の宗教が示しているように、個別的な意識（精神）は、より大きな、そしてより純粋な意識（精神）へと同化されるということです。

一方で西欧のキリスト教徒たちが「正義の戦争」という観念と取り組んでいる間に、他方で仏教徒やヒン

ズー教徒たちは、争いの内的な原因を突きとめようとしました。キリスト教徒たちは「地上の平和」という高貴な到達点を求めたのですが、反対に、東洋の精神的指導者たちは個人内部の気高い平和（シャンティーサンスクリット語。寂静。）への途を見つけようと努めていきました。原理主義的なキリスト教徒たちは、漠然とですが、キリストの再臨と、そのとき永久に確立されるとみられる平和を待つべく彼ら自身備えていたのですが、東洋の求道者たちは彼ら自身の内に平和（安穏）を獲得すべく、直ちに瞑想に向かったのです。彼らは武装した力（軍隊）ではなく、内なる力を求めたのです。以上要するに、西欧的な取り組みとは「外なる平和（outer peace）」をめぐってのものでしたが、東洋のそれは、「内なる平和（inner peace）」に中心がおかれたといえるでしょう。[1][2]

そうはいっても、西欧のキリスト教的伝統が内なる平和をまったく無視し、逆に東洋の精神的伝統が外なる平和に何も注意も払わなかったというならば、それは間違いだといえます。事実、聖書は、山上の説教である「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」というような、強い外的志向をもった幸福を語る言葉の他にも、たとえば「あらゆる人知をこえる神の平和」とか、「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない」というような、内なる平和に言及する意義深い言葉をもっています。[3]

世界的リーダーとなった多くの優れたクリスチャンたち、それには、アメリカ合衆国の大統領で国際連盟の発起人となったウッドロウ・ウィルソンや、同じく国際連合の設立に背後で尽力した合衆国大統領フランクリン・ルーズベルトなどが含まれますが、そういう優れた人たちは、内なる力とか精神的な平和のもつ大きな価値を認めていました。しかしこうした事実があるにせよ、キリスト教的文明は、世界平和を築き上げていく方法として、内なる平和に留意するということが伝統的に少なかったということはできます。

西欧キリスト教の伝統が内なる平和をまったく無視

したとはいえないのと同様に、東洋の精神性が、外なる平和に取り組む努力をしなかったということもまた誤りでしょう。紀元前三世紀のインドの支配者であったアショカ大王のような、仏教者であり、しかも統治者であった人たちは、仏教の教えと実践とを流布するということに加えて、公正な諸法律を制定し、平和な王国を築くことにおいて、大きな足跡を残したという事実があります。また、偉大なインドの叙事詩である『マハーバーラタ』には、戦闘の時におけると同様に、平和調停時にあたって支配者が則るべき、世間的な規則や規定が満ちあふれています。しかしそれにもかかわらず、東洋では、平和は外的に実現される前に、まずもって心の内側に得られなければならないという、内的な性質をもつことがらとして考えられていたということも、本当だといわざるをえません。

どちらの側の解決法が優れているかについて判決を下すことも、同じく誤りに陥ることになるでしょう。実際、内なる平和と外なる平和とは、相互に補完しあうものです。そこでは、他方を欠いた一方は不完全なものになります。つまり、両者が一つになってのみ、永続的な、そして完全な平和への基礎をもつことができるのだと私は信じています。そしてこのことは次第に認められるようになってきました。

一　内なる平和はどのように世界平和を促進するのか

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」
―国際連合教育科学文化機関憲章（ユネスコ憲章）

以上見てきたように、内なる平和とは個々人における平和の感覚なのです。それは、あなたの、私の、そして私たちの仲間である人間誰でもの、心の内にあるものです。ときにそれは、心の平安とか、情動の沈静とか、魂の充足として感じられることがあります。東洋の宗教では、こうした平和的感覚は、瞑想や唱題などの精神的実践によって達成されるか、あるいは強めることができると信じられています。こうして、それ

を実践する人々は、心の内部に存在する平和に気づくにいたるのです。内なる平和はまた、無私の精神において得られるとしたり、さらには礼拝のために集まった人々のなかにあるとしたり、あるいは精神的目的に対しての協力において得られると、つけ加える信仰もあります。

それでは、内なる平和は精神的実践によって漸次的に発展すると仮定したときに、この内なる平和はいったいどのようにして、この人類がずっと求めてきた世界平和という究極目標を達成することになるのでしょうか。多くの人にとって、この答はまだはっきりしていないといえます。

なかには、内なる平和が世界平和への障害となるとさえ論ずる人がいるかもしれません。もしも内なる平和を実践する人が自己満足に陥ってしまうならば、彼らは、より大きな人類社会へ貢献するなどということを望まないということになるでしょう。というのは、彼ら自己満足的な人々は、外の世界には関心をもたないで、むしろ自分だけの孤立した生活とか、隠遁生活を求めるからです。

日蓮仏教をはじめとする重要な多くの宗教的伝統が指摘することは、上に述べたような自己満足的な人々は、精神的な実践によって得られた内なる平和が自我の観念を拡大させ、道徳のもつ役割を強化させ、さらには世界への責任感覚を増大させるという事実に目をふさいでいるということです。それに対し、真に実践する人は、単に人間の兄弟姉妹だけでなく、生命を織りなすすべての感覚的存在（有情）の幸福にいっそう熱心になっていくのだと教えています。

しかしこれまで述べたところでは、世界平和へ個人がどのように寄与するかについて、まだ十分に説明されてはいません。それにはさらに念入りな分析が、つぎの二つの論理的な面において必要です。それは一つには、内なる平和が、実践する人の行動にどのように影響を与えるかということであり、二つには、それの世界全体への影響です。これらの二つの面について何がいえるかを、文献、道理、そして私自身の経験を織り交ぜつつ明らかにしてみたいと思います。

(一)内なる平和を保つ人であればあるほど、外に対して平和的に振る舞う

人がその生において、より多くの安穏と充実を感じているとき、自分の個人的な欲望は、ねたみや恨み、あるいは他人への悪意というような悪徳として戒められなければならないと考えるのは、道理からして当然だといえます。そうしてそのような人は、他の人との関係のなかで、暴力的に振る舞うとか、敵意をもって干渉しようというような衝動は、ほとんどもたないか、あるいはまったくもたないように思われます。アルバート・アインシュタインが述べたように、「暴力はつねに道徳心の低い人々を引きつける」ということが本当ならば、暴力が起こったときには、大いなる道徳心は一致してその暴力を忌避することに向かっていくでしょう。

仏教徒とヒンズー教徒にとって、平和的な振る舞いの根本には、道徳的・情緒的な理由とならんで哲学的理由が存在しています。仏教徒やヒンズー教徒は、利他主義のもつ精神的根拠を自分のものとしているのです。

これに関して、仏教やヒンズー教の他の聖典もそうですが、とくに『法華経』において強調される三つのことがらがあげられます。それは、①全人類のみならず、感覚をもったすべての存在（有情）にさえも存在するところの、より高次の本性（仏性、あるいはヒンズー教でいう神的な閃きを含むアートマンあるいは魂）への信仰、②すべての生物の相互依存性（仏教における縁起生、サンスクリット語でプラティーチャ・サムットパーダ）、そして③カルマ（業報、つまり、よい行いは行為者によい果をもたらすというように、すべて行為は同等にその報いを受けるという考え）です。

したがって、人が聖なる教えについて知れば知るほど、またそれを忠実に実践すればするほど、その人はより利他的な人になっていくといえます。個別的な自我は、すべての存在に共通して潜在する精神と、普遍的な相互依存性を信じることで拡大され、その結果、他者に対するよい行いが、事実上、自分自身に対するよい結果を生むということになるのです。ですから、

信者たちが、他者への慈愛（メッター）と同情（カルナー）とを示すのはもっともなことなのです。彼らは、より多くの無私の行為をしているように見えますし、また平和のために働いているというのは本当だといえましょう。

ここに述べた三つの基本的な精神的信念から、道徳の基礎的な原理が、容易に、また直ちに導かれることになります。まず、あらゆる人間に潜在する神聖な本性を覚知するならば、すべてのものは本質的に平等である、ということが容易に受け入れられます。そして、神聖な本性、精神的な相互依存性、カルマ、というこの三重の認識から、生命のもつ尊厳性に対し畏敬を表す必然性と、そうしたいという欲求が生じてきます。「殺生してはならない」という仏教徒の言葉は、モーセの十戒の第六番目の掟に一致してもいます。さらに、「いかなる存在であっても憎んではならない、たとえ思惟の中でも生けるものを殺してはならない」[4]というように、さらに立ち入って述べている仏典もあります。

すべての人間、さらには感覚をもつすべての存在（有情）が「仏性」を授けられているという主張は、単に人間の生命への尊重を促進するだけでなく、すべての生命に対する崇敬を勧めるものです。この仏教の主張は、地球的な思考、世界家族という考え、そして環境に対して責任をもつということを促進します。さらには、あらゆる存在を仏陀の子供として見なすことが仏教徒の義務であるということになります。というのは、『法華経』の中で、仏陀が、自分は「一切衆生の父」[5]であると述べているからです。

精神的な意味の自尊とは、偉大な平和と自由への欲求がちょうどそうであるように、他者に対して大きな尊敬を払うことと同じことを意味しています。「私があなたの自由を制限するようなことをしたくないだけの自由を私は愛する」と述べたのはマハトマ・ガンジーでした。

精神的なことにたずさわる人はまた、他者の行為に影響を与えるという責任をもっています。『ダンマパダ』の一節に、「己を他者の身におくことで、他者を殺してはならないと知るべきである、のみならず他者を

して殺させてもならないと知るべきである」[6]とあります。生命への尊敬は、暴力を用いないという非暴力（アヒンサー）の哲学へ導き、さらに率先して暴力行為を予防する取り組みへと導きます。

内なる平和が外なる平和を導くという実例として、多くのノーベル賞受賞者たちが、平和運動の内的な次元に大きな重要性を見ているということを、私は指摘したいと思います。たとえば、ウッドロウ・ウィルソン、ミハエル・ゴルバチョフ、ネルソン・マンデラといった各大統領たち、そしてもちろん、マザー・テレサやダライ・ラマといった宗教的人物たちもそうでした。しかしおそらく、外なる平和や改善に向かっての、精神的および非暴力的な取り組みの重要さを示した最大の提案者であり、かつ実践者であったのは、マハトマ・ガンジーです。彼はインドを非暴力的方法で独立へと導きました。ガンジーは、非暴力（アヒンサー）というインドの精神的な考え方から大きな影響を受けるとともに、それを忠実に信奉し、イギリス植民地統治者たちの内なる人間性に、ひたすら訴えようとしたのです。ここでもう一人、内なる平和に訴えた著名な国際的指導者をあげるならば、元国連事務総長であったウ・タントです。彼は信心深い仏教徒であり、重要な決定を下す前に、訪問してきた要人や職員に断ってさえ、私的な瞑想を数分間行ったということを『国連からの展望』という自伝のなかで明かしています。

しかしながら、たとえ私たちが、内なる平和は一人一人に平和的な振る舞いをさせるという考えを認めたとしても、まだゴールである世界平和に到達するとはいえません。事実、次のようにはっきり問いかける人がいるかもしれません。「もし私が今日、私の近隣における平和の大切さを感じ、そのように振る舞ったとしても、コンゴとかコソボとか、あるいはタジキスタンのような、遠く離れた場所での紛争を解決するためにそれがいったい何の役に立つのでしょうか。私のしている努力が、戦争を防ぐこととか、慎ましく生きている人々の苦悩を和らげるために、どんな効果をもたらすのでしょうか」と。

このように、多くの人々は、世界平和へ寄与するこ

とについて、個人としてはやるせなさや無力を感じているのです。さらに多数の人々は、全般的にいって、世界全体へ個人が影響を与えることの不可能さを感じているのです。[7] このやるせなさとか、落胆という感覚には、それなりの正当な理由があるといってよいのでしょうか。唯物論者や現実主義者は「そのとおりだ」というでしょうし、社会活動家は「おそらくそうでしょう」というでしょう。しかし、精神的な人は「まったくそのようなものはない」と断言します。精神的な人は、たとえ他の人々が遠く離れた所にいたとしても、内なる平和はいろいろな仕方で拡大しうるのだということがわかっているのです。

(二)平和は個人から世界へたしかに拡大する

現代インドの精神的指導者、シュリ・チンモイは述べています。「平和はまずはじめに個人が成し遂げるものです。次にそれは集団的達成へと拡大されます。最後にそれは最大の成就へといたります。」ダライ・ラマも、このシュリ・チンモイとほとんど同じことを述べています。

「内なる平和を通じて真の世界平和を達成することができます。ここに、各個人のもつ責任が重要であることは明らかです。平和な雰囲気は、最初に私たち自身の内部で創られなければなりません。それから次第に、私たちの家族、地域、そして最後には全地球を含むまでに拡大されなければなりません。[8]」

近くの人々から遠い人々へという、この平和の漸進的拡大は、次の三つの仕方で個人によって達成されていきます。それは、①各人自らの活動によって、②他人へ影響を与えるところの活動によって、そして③ヒンズー教や仏教が主張するように、精神的あるいは深遠な方法によって、です。

最初の仕方では、すでに述べたように、個人自らの精神的な諸活動が他者の苦痛を和らげることとなるでしょうし、地域社会および世界全体における外なる平和を求めることになるでしょう。二番目の仕方では、個人が模範となることによって、また社会的な相互作用によって、外なる平和を探求することとなるでしょう。諸個人が、より平和であることの大切さを感じ、行動していくならば、諸個人は他の人々に影響を与えていくでしょう。つまり諸個人は、より高次の、そして広範な（つまり、広く適用することのできる、より卓越した道徳性をもつ）社会規範を築くことによって、地域的なものであれ、（たとえば国連のように）国際的なものであれ、平和に貢献している組織をサポートすることによって、他の人々に影響を及ぼすことになっていくでしょう。そして平和を支持する人々が増えていくにしたがって、社会における一般的理解が広がっていき、平和的な行いが（私たちがそれに少しずつ向かっているところの）一つの規範となっていくのです。

教養のある、精神的発展を遂げた人が多いということは、そこから啓発的な、平和推進への決定をすることができる指導者を選ぶにあたって、より大きな母体があるということを常に意味します。このことはまた、進歩的な指導者たちが公職にあって、平和へ向かって大きな前進を唱道していくことができるということを意味するといえますが、それができるのは、この指導者たちが、彼らが必要としている賞賛と尊敬を人々から受けるだろうからです。ネルソン・マンデラ、ミハイル・ゴルバチョフ、レスター・ピアソン、ウッドロウ・ウィルソン、そしてマーチン・ルーサー・キングのようなリーダーたち（もちろん釈尊やイエス・キリストも含まれます）は皆、彼ら自身世界的リーダーとなるずっと以前から精神的指導者を誉めたたえていた人たちでしたし、生涯、深い道徳的、あるいは精神的な影響力をもっていた人々でした。

さて、影響の三番目の仕方は神秘的なものといえ、学術的な用語で説明することが最も難しいものです。仏教、ヒンズー教の双方とも、自然界の背後に、その世界と密接に結びついている意識（精神）の世界があるとしています。意識（精神）は自然界によって影響を受けるとともに、自然界に影響を与えるのです。シュリ・チンモイは次のように述べました。

「すべてのものは内なる世界に出発点をもっています。内なる世界は私たちが種をまく場所です。もし私たちがそこに平和と愛の種子をまくならば、やがてその種は大きくなって、平和と愛の樹木へと成長するでしょう」

人間の愛や心配というような感情は、型どおりの学問では容易に説明され、理解されないような仕方で、遠方へと運ばれていくことができます。祈りや願望は、意識を通して遠くの他者へとさざ波のように伝わっていき、影響を与えるのです。同様に、ある個人における高次な精神の目覚めは、人類の精神全体を導くところの助力となります。高次な精神の達成は、有限な肉体や狭量な自我を超えて、魂の精神的本性へ、またそれとすべての存在者の結合へといたるところの深い自我の覚醒を含んでいます。実際、向上心をもった精神は、おのずと（それらが菩薩、諸天あるいは天使と呼ばれるにせよ、何であれ）より高い精神的諸力へといざなわれ、その結果、それらの精神的諸力を地上における平和への推進力として感じとるのです。

これらの存在や諸力は、静謐のうちに作用しますから、それらの活動を詳細に測定することはできないのですが、それにもかかわらずこうした平和への推進力は現実のものであり、効力をもったものです。永遠の仏陀に帰せられる特性のなかに、無限な力、永遠の安らぎ、そして限りない同情があるのは、このことを意味します。

個人がこの普遍的（宇宙的）意識と触れ合うときに、向上心をもった人は、普遍的な力と一体となって平和へ向かって行動することが容易であることを見出します。その人は、こうして高貴な根源あるいは高次な力の手駒となり、想像の域をはるかに超えた仕方でその力に仕えることができることになります。精神的な諸力は、空間と時間の境界を越えて作用するので、外見上では、その力は奇跡を起こすように見えます。[9] とりわけ瞑想や唱題、あるいは祈りを通して強められるならば、この強化された高次の意識は、遠く離れた他者に彼らが自分の内にもっているものを発見する手助けをするために、平和と善意とを送り出すことができると思われるのです。

なかには、究極的意識（パラマブラーフマ）とぴったり調子を合わせるようになる個人が現れ、彼ら自ら直接の伝道者となっていきます。これらの人は、東西両世界にわたる偉大な精神的教師だということができます。彼らの光輝と覚醒はきわめて大きいものですから、彼らは、救済、解放または覚醒を得るための方途、あるいは乗り物として、その信奉者から見られるのです。

二　内なる平和と外なる平和との統一のために働くこと

内なる平和が外なる平和を促進することができるのと同様に、外なる平和は内なる平和の発展にとって大切だといえます。外なる平和は、人々の物質的、精神的な必要を満足する機会をつくり出します。

戦争が激しくなり、外なる平和が失われるときには、安全や安寧、あるいは精神的実践を求めるための時間や手段を見出すことがますます困難になってしまいます。しばしば戦争は、精神的な人々をして、内外の平和という考えとは正反対であるような行動にたずさわらずにいることが、困難な立場へと追いやってしまいます。戦争は不可避的に、それを明言しないとしても、不道徳な行為を支持させる圧力をつくり出すのです。また戦争は、生活、食事、衣服などの基礎的必要品を満たすために、個々人に膨大な時間を費やさせ、それによって大切な物事を失わせるにいたるのです。これに加えて、他の人々への戦争の影響を和らげるための、急を要する、また直接必要とされる建設的な努力は封殺されてしまうのですが、それはいうまでもなく、武器の製造や、兵士の補充のために資源を使ってしまうからなのです。武器による戦闘は、個人に多大な心理的、精神的な負荷を与えます。恐怖の感情と憎悪に基づく思考が人の心を曇らせてしまい、内なる平和を見出すことは一層困難となります。[10] このように、戦争は、この地球の環境にとって有害であるだけでなく、地上の精神的な雰囲気にとっても有害なものなのです。

外と内の平和という、この古くからある考えを対照

させることによって、意義深い洞察を得ることができます。外なる平和とは、通常、戦争と武力衝突が存在しないことだとみられています。他方、内なる平和は、深い調和と充足の感情が存在することとして特徴づけられています。こうした通常なされる定義によって、外なる平和は内なる平和なしでも可能だとされているのです。

しかし、たとえば、もし二つの国あるいはグループに属する人々が、心に憎しみや悪意の念を抱くならば、たとえ彼らが互いに争っていないとしても、そこには内なる平和は存在せず、それとともに、外なる平和も潰え去ってしまう可能性をもつのです。ですから、ここで外なる平和の定義を、否定的あるいは積極的なありかたから、肯定的あるいは消極的なありかたへと拡充することが望ましいといえます。そして、そこでは平和は、外的な協力とともに互いに率先する努力があることとしてみられるのです。同様に内なる平和は、自分自身を取り巻く人々の平和を含むものへと拡大されることができるのです。

さまざまな仕方で、内なる平和と外なる平和とは相互に補強しあいます。現代の多くの精神的集団は、内外の活動を通じてこの調和をもたらすことに積極的です。二つの実例をあげるならば、創価学会とシュリ・チンモイの活動がその例といえます。創価学会では、「内なる平和」と「全人類の幸福」の双方をめざす活動を広宣流布と呼んでいます。[11] また同じ趣旨から、世界平和のための精神的な祈願である丑寅勤行がありますが、これは「世界平和と真の仏教のすみやかな世界広布達成を祈るために毎晩行われる宗教的儀式」です。[12] 創価学会は、人権擁護運動の支援、国際連合の支援、そして人種、肌の色、信条あるいは国籍の違いを乗り越える世界共和への支援活動を行っています。

シュリ・チンモイセンターは地球平和マラソンを主催していますが、これは参加者がオリンピックのやり方で平和トーチを掲げ、平和への覚醒と「世界平和は一歩ずつ築かれる」との呼びかけを行う定期的な（隔年の）行事であり、いまや七十以上の国に拡がっています。センターはまたシュリ・チンモイ平和開花運動を推進

してきましたが、それには数千の用地が平和目的のために提供されました。つまり七十余の国々がシュリ・チンモイ平和―開花国家となったのです。シュリ・チンモイ自身、国連において、毎週の瞑想指導を三十年以上行ってきています。彼は、外なる制度のもつ大きな目標と内なる深い平和体験の間に、ある強いつながりを国連に見ています。彼にとって国連とは「世界という体にとって心臓にあたる家」なのです。

「国連は単なる建物ではありません。それは一つの観念でもないのです。それは成長し、輝き渡り、そしてその光を世界に余すことなく示すところの現実だといえます。国連はすでに、その政治的力と並んで精神的な力を確立してきました。政治力と異なって精神の力は静かに作用します。ですから、精神の力は私たち人間の目を引きつけるものではないのですが、より善い生、より輝いた生、そしてより充実した生をこの世に求める人々の心には、たえず感じられるものです。」

創価学会やシュリ・チンモイセンターのような運動において、私たちは東と西の総合、そして平和へ向かう内と外からのアプローチの総合をみることができます。

結論

内なる平和と外なる平和との結びつきの重要さは、広範に認められつつあります。池田大作創価学会インタナショナル会長は、西暦二〇〇〇年の平和提言のなかで、次のように述べています。「法律的、制度面での対処もさることながら、やはりこうした取り組みを裏支えする人間精神の変革、すなわち〈内なる差異の超克〉による普遍的な人格の形成という画竜点睛を欠くと、はかばかしい成果は期待できないのではないでしょうか」[13]と。

争いの深い原因への自覚なくして、世界中の戦争を終結させるということは困難であるか、あるいは不可能でしょう。また逆にいえば、高い行動規範を発展させ促進させるための国際的ないしは地球的な諸機関な

くして、人々自身の内なる平和を発展させ、それを他へと拡大する精神的実践を行っていくための手段や、個人の安全や保障を見出すことは難しいといえましょう。

東と西は、キプリングが見つけ出せなかった仕方で互いに接近しています。ほとんどすべての東洋諸国の人々や政府は、国連に信頼をおいていますが、それは国連がいまや一つの世界普遍的な機関であるとともに、その発展に精力的な役割を果たしているからです。西欧諸国の政府は、いまや個人によりいっそうの焦点を当てています。このことは、不可譲の人権についての新しい主張、さらには人間の安全保障についての新しい主張が例証しています。ここでいう人間の安全保障とは、各個人すべての安全と保障とが（身体的、社会的そして精神的という）あらゆる側面にわたって重要な目的とみなされることです。これらの人間的資質は普遍的なものであり、誰であれ、どんな職業のものであれ、またどこにいようと奪われることのないものです。

この論説のタイトルである「如蓮華在水 LOTUS ON THE LAKE」は、本論のメッセージである、平和にとって不可欠なものは内と外とにわたるのだという、平和の本性にふさわしい比喩だといえるでしょう。蓮華の花は水の上に咲きますが、その水面のずっと下に、地中深くその根は下ろされているのです。外なる平和とは、湖水と外なる生を美しく飾る蓮華の花です。内なる平和とは、水面下の茎であり、内なる精神のなかへと深く下ろした根です。蓮華は壮麗な花を咲かせ、その香りは生の輝きと世界の改善へと向かって、遠く広く拡大していくのです。

世界平和は開花しつつある夢です。東と西の人々が集まるということは、ちょうど内と外との平和のように、この夢を実現することになるでしょう。

注

（1）私は（キリスト教徒として）、仏教はその長い歴史において、聖戦とか宗教戦争などはもちろんのこと、侵略的戦争を支持した場合でも、これを謝罪するに躊躇したということはほとんどなかったということを認めなければならない。ヨーロッパにおけるキリスト教十字軍やカトリックとプロテスタントの長期の戦争、あるいは植民地における布教運動の間に行われた現地民の虐殺などに比べられるものは、仏教には何もない。事実、いかなる主要な戦争も、歴史上、仏教徒によってはじめられたことを同定することは困難であるし、まして仏教の名の下に戦争が行われたことはほとんどないのである。いくらかの仏教徒が、第二次大戦の戦前、戦中において日本帝国の侵略的行為を支持したことはあるが、その侵略と軍事的拡大の主な宗教的基盤は国家神道であった。今日のミャンマーは、軍部の指揮下にある仏教志向の国であり、国内では多くの人権侵害がなされているが、隣国との戦争をするにはいたっていない。また、多数派のシンハラ族に歩調を合わせたスリランカ政府の行動は、北部のタミール族への人権侵害によって同様に批判されているが、タミール族はさまざまな土着のグループや宗教からなり、彼らはスリランカから逃れるために、広範なテロリズムや虐殺をしばしばしているのである。

（2）平和への二つの性質の異なるアプローチにおいて、私たちは西欧と東洋における広範な外的そして内的な志向をそれぞれ見、さらに物質（そして唯物論）と精神（そして精神性）へのそれぞれの強調を見る。西欧は主として外的変化を求めるが、それは産業革命と現代の急速な技術革新を通して、客観的・経験的探求および道具としての現代科学を用いることによってである。一方、東洋は伝統的に内観的探求と直観的アプローチを通して内的発展を追究するのである。

（3）ここにあげた聖書からの三つの引用はキング・ジェームズ版聖書によるもの。それぞれ、ピリピ書（四・七）、ヨハネ福音書（十四・二十七）、マタイ福音書（五・九）（日本語訳は共同訳聖書を用いた―訳者）。

（4）Dasabhumika Sutra（漢訳『十地経』）, in Har Dayal, *The Bodhisattva Doctrine in Buddhist Literature*, Kegal Paul, Trench, Trubner and Co., London, 1931, p.199, as cited Kenneth Kraft, (ed.), *Inner Peace, World Peace: Essay on Buddhism and Nonviolence*, State University of New York Press, Albany, 1992, P. 9.

（5）『法華経』において釈尊が「今此三界皆是我有　其中衆生悉是吾子」と述べたとされる。*Lectures on the Sutra: The Hoben and Juryo Chapters*, NSIC, Tokyo, 1974, p.163 を参照。

（6）川田洋一「大乗仏教と生命倫理」と題する ICANAS, Montreal, August 29, 2000 に提出された論説からの引用（ただし強調した箇所がある）。

（7）ほとんどの人たちが、政治的リーダーシップの高い地位がなくては、自分たちは社会変化への影響力を

及ぼすことができないと感じているのは皮肉なことである。また現実に指導的地位にある人々が、自分たちは社会、つまりこれら同じ諸個人が望むものによって厳しく制限されていると感じるということも皮肉なことではないだろうか。政治家は、多くの人々の賛同なくしては、どんな大胆な活動も、次の選挙をひかえた身にとって危険だと感じがちである。

(8) 一九八九年六月、コスタリカのサン・ホセにおけるダライ・ラマの講演。In *Buddhist Peace Fellowship Newsletter* (Fall 1989), p. 4, as quoted in the Introduction of Kenneth Kraft (ed.), op. cit.

(9) 創価学会が奉じているさらに深遠な教義は「一念三千」である。これは各瞬間あるいは思いが、三千種の世界におけるさまざまな条件すべてを示す潜在的な力をもつということであり、存在するものの全領域を覆うものである。かくして、些細な行動さえも、意識や表現における革命的な変化をもたらす可能性をもつということになる。

(10) ウ・タントは彼の自伝の中で、キューバのミサイル危機のときのキューバ訪問中に、努めて瞑想をしたと述べている。*View From the UN*, Doubleday, New York, 1978.

(11) NSIC, *Lectures on the Sutra: The Hoben and Juryo Chapter*, NSIC, Tokyo, 1974, p. 89.

(12) Daisaku Ikeda, *The Human Revolution*, Vol. 4, Weatherhill, New York and Tokyo, p. 204 (Glossary).

(13) Daisaku Ikeda, "Peace Through Dialogue: A Time to Talk, Thoughts on a Culture of Peace", January 26, 2000, available at <www.sgi.org>.

(A・ウォルター・ドーン／
コーネル大学アイノーディ国際研究センター主席研究員)
(訳・いしがみ ゆたか／創価大学教授)

(原題：A. Walter Dorn, LOTUS ON THE LAKE: How Eastern Spirituality Contributes to the Vision of World Peace)